

第7分科会「音楽教育」

分科会の報告と討議のまとめ

1. 実践報告(CD等による)

- 行橋・京都 小特支1・2 ああもみの木(ハンドベル) 小3 ドレミの歌/ていーちでいーる
- 築上・豊前 小全 博士のなげきの歌/宮仕えの歌 小3・6 グランド電柱
- 遠賀・中間 小特支2・4・6 風三郎 小特支3 妖精たちの歌 小特支1・5 だんごむし
- 粕屋 小3・4 (複式) クリークの子守歌 (ICレコーダー)
- 福岡 中1・2・3 COSMOS (ブロック合唱) 中1 輝くために (パート練習・合唱) (PC)
中(特別支援学校) スタッカート/50音/君をのせて (カセットテープ)
小4 こきりこ (PC) 小5 こげよマイケル/アフリカンシンフォニー (PC)
- 小6 ボイスアンサンブル/ハンガリアン舞曲 (PC) 音楽委員会ミッキーマウスマーチ (PC)
- 浮羽・三井 レポート提出のみ
- 大牟田 小5 こげよマイケル/キリマンジャロ

今次県教研音楽教育分科会では、6支部からのレポート報告があった。PCやICレコーダーからの出力提案も含め音源の提案は6支部より23あった。分科会の始まりにあたり、まず歌う活動を行い、行橋・京都支部の松岡ゆかりさんより第69次の全国教研報告があった。「大人の都合で子どもたちを型にはめていないか。音楽には力があるからこそ、悪用されることも、政治的圧力を受けることもある。大人が都合よく子どもを動かしたいがために音楽を使うことは、思考停止の子どもを生む。音楽を『子どもを操る道具』にしないように気をつけていくという考えに出会うことができ、本当に来て良かった。」という内容の報告であった。引き続き専門委員から、新型コロナウイルス感染症の影響で例年通りにいかない厳しい現状が出されると思うが、子どもたちと音楽を愛する私たちの思いを確かめる時間にしたいという基調提案があり、5つの討議の柱の確認をした。次に、各支部からの提案を音源を含めて8分ずつ行った。報告の全体的な傾向としては、感染予防で音楽活動ができにくいためか、歌唱教材だけでなく合奏や鑑賞等の報告が増え、実態に応じて工夫してとりくんだものが多かった。

2. 討 論

提出されたレポートに関する報告と質疑が終わった後、1時間程度討論の時間をもった。各支部から出された実践について子どもたちの声や姿から感想を出し合ったり、討議の柱に沿って各支部でのとりくみを交流し合ったりした。

【遠賀・中間】の『だんごむし』の歌声に「ぬくところはぬいて歌っていて、とてもかわいらしい。」「音楽が大好きと伝わる音楽がすばらしい。」という感想が出された。1～3番を1年生と5年生2人で1人ずつソロを歌ったとのことだった。『妖精たちの歌』で「トリルの所を歌っているのがかわいらしい。」という感想が出された。報告者から「あ～♪」と歌いながら踊るので2番に入るのが遅れてしまうが、楽しんで歌っていると説明された。

【大牟田】の『こげよマイケル』でいろんな音が聞こえてきたのは、どのような音だったのかという質問が出された。子どもたちは鍵盤ハーモニカとレコーダーで3つのパートに分かれて演奏、教員がオルガンのリズムマシーンで8ビートをならしながら、ベースの音を弾いたら、とても盛り上がった。また、授業後のふり返りを毎回記録用紙に書かせ、教員のコメントを長めに書くようにして人間関係づくりに生かしている。音楽専科だからできることだと話された。

【福岡】から特別支援学校中学部で音楽の授業をする際、やる気満々の子が音を外して大きな

声で歌ってしまうのをどのようにしたらよいのかという質問が出された。【築上・豊前】から『博士のなげきの歌』でソロを歌った6年生の男の子も、低学年の頃音を外しながら歌っていたが、だんだん友だちの声を聞くようになり、6年生になってからソロを歌い上げることができたことを話された。また、共同研究者の渡邊先生から「誰のための音楽なのか。」という提言があった。「この子はどうしたいのか？」を見抜き、それぞれの特性を把握して授業を創っていったらよいのではと助言された。教員はどこまで指導したらよいのか…私たちが悩む所である。

【八女】の小中一貫校で小学4年生～中学生に教えている先生は「音楽科にしかできないことがあるのでは」という意見を出した。教えることをきちんと教えれば、きれいに歌えるようになり、達成感も味わえる。4年生の時クラス崩壊していた子どもたちも、指導していくときれいに歌えるようになっていった。今年はコンクール会場に行くのではなく、学校で動画を撮影することになったので、本番で欠席する子もなく全員で歌うことができたと話された。

【朝倉】からは、自分のやりたいことを子どもたちに理解してもらえないのでどうすればよいかと悩む気持ちが分かるという発言があった。音楽は表現する場であるが、どんな表現をするかを追究するとき、技術も必要だが感じ取る気持ちもいるのではないか。【八女】の合唱は、言葉が歌にのって、歌が伝わってくると言われた。

【久留米】からこのような状況の中で工夫して音楽をし、音楽を通して心を解放している実践を聞くことができたという感想が出された。授業には、楽しみながら学び取ることと、教えることの両面がある。高学年の声にあこがれさせると、めざすものに向かってがんばれるというとりくみ方もある。筑後地区では組合員がリードして音楽祭を行い、子どもたちはそれに参加して聞くことで勉強していた。57回続けてきたが、今年は開催されなかったとの話があった。

【福岡】の小学校音楽専科の先生から、小学校は中学校に比べると教育課程のチェックが厳しく、自主教材を入れるのが難しいという発言があった。中学校の方が教科書の曲だけでなく、自由に自主教材にとりくむことができていたようだ。自主編成をできる環境は、それぞれの支部や学校がおかれている実態、また管理職の意向にも関わってくる。私たち組合員は、これまでに教科書教材をやりながら、したたかに自主教材を入れて実践をつくってきた。組合員を増やして、もっと教研活動を活発にしていけたらよいのだか…組織拡大も大きな課題となる。

【宗像】からは知らない歌（自主編成）がたくさんあるのが教研の場、【行橋・京都】の『クラスの歌』を聞いて、自分もできるかなと思った。また「リズム遊び」とはどういうものかという質問が出された。【築上・豊前】もリズム表現を実践していて、子どもたちがピアノのリズムに合わせてステップをしたり、テーマの動きを表現したりするものであると語られた。高学年が表現するのを見て低学年が真似をし、自分を解放して生き生きと表現するようになる。沖縄のリズムもあるということだった。共同研究者の渡邊先生も、過去にリズム表現を運動会で実践されていて、リズム表現をすると体づくりもできて発想力もつくと言われた。

それぞれの実践を語ってもらった中で、子どもらしい歌声を報告した小学校の実践が、全国教研正会員レポートとして選ばれた。その後共同研究者から、厳しい状況の中で音楽を創り上げ実践をもってきたことに対して敬意を表するとのお話があった。5つの討議の柱についてこの場で語り、ピンチだがチャンスでもあるという大事なことに改めて気づいたので、通常の音楽活動が再開されれば尚一層実践が進められるのではないか。このような状況の中で苦しみながらやってきたものは、私たちが求めてきたものであり、後につながるものであると助言された。最後に、いつもとは違う県教研となったが、いつもとは違う学びができたこと、その中で音楽の力を改めて確認できたので、これから現場に戻って実践を広め、深め、種をまき、来年も実践を持ち寄り学んでいこうと確認した。